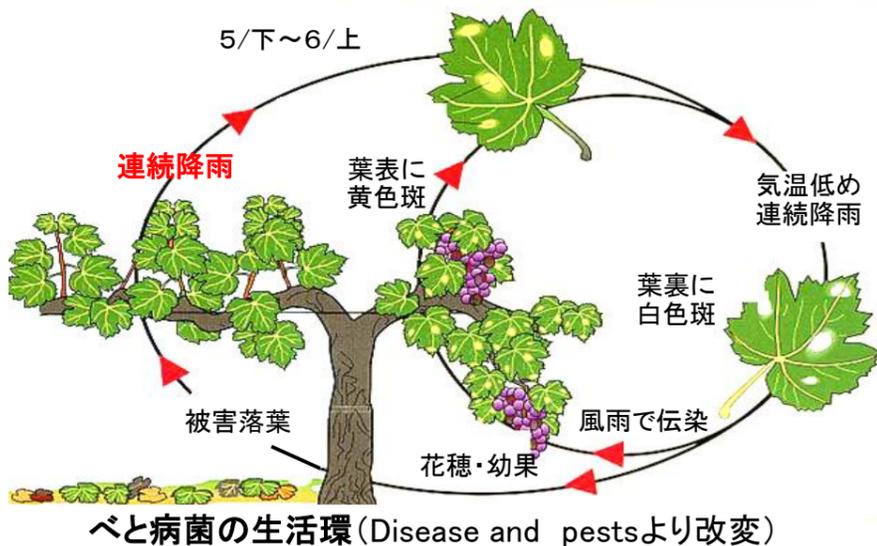


ブドウのべと病の防除対策について

平成26年5月
果樹技術普及センター

◆べと病菌の生活史



- ・病原菌は、落葉した葉の組織内で卵胞子の形態で越冬する。
- ・5月頃からの降雨で、適温と湿度を得ると卵胞子が発芽し、分生胞子を生じ一次伝染源となる。
- ・その後は、降雨などにより、二次伝染を繰り返す。5～9月頃まで発生が続く。
- ・発病の適温は、気温20～24℃で、曇雨天が続くと発生しやすい。

◆防除対策のポイント

(1) 新梢管理の徹底

樹勢が強い場合や棚が暗い園では、芽かき・誘引・摘心などの新梢管理を段階的に実施し、棚面の明るさや風通しを確保し、葉液が十分に付着するようにする。

(2) 発病の確認

発生の早い年は、開花期以前に花穂や葉へ発病し、その後多発する傾向があるため、管理作業に合わせて発病の有無をこまめに確認し、**発病した花穂、果房、葉は、伝染防止のために直ちに取り除き、園外へ持ち出す。**



開花前の花穂に発生すると、穂軸や支梗の一部が、淡褐色（アメ色）となり、全体に生気を失い、白色の毛足の長いカビを生じる。うどんこ病のカビに似ているが、毛足が長いのが特徴である。

(3) 標準散布量の徹底

- ・10aあたり300～400リットルを目安に、新梢の繁茂状況や降雨状況等に応じて散布量を調整する。
- ・スピードスプレーヤの隔列散布によるかけむら、ほ場外周部の散布不徹底等が指摘される事例もあるため、標準散布量の徹底と葉液の付着状況の確認を行うとともに、必要に応じて補助散布を行う。

(4) 散布間隔の厳守

- ・感染から発病までは7～10日と短いため**展葉5～6枚から袋かけまでは10日以内を目安に予防散布を徹底する。**
- ・低温が続く生育が遅れがみられる場合は、防除暦の生育ステージに合わせて散布を行うと散布間隔があいてしまうため、散布間隔（日数）を優先して薬剤散布を行う。
- ・**次回散布予定日に降雨が予想される場合は、散布を延期せず降雨前に散布する。**
- ・**連日降雨が続く場合は、日中でも露がきれた時点で高温に注意し、薬剤防除を行う。**
- ・散布後に連続的な降雨や強い降雨があった場合は、葉液が流され残効が短くなるため、散布間隔を短くする。
- ・散布時に葉が濡れている場合は、SSの送風ファン等で露を払った後に、丁寧に散布する。

